

令和6年度一橋大学学位記授与式 祝辞

株式会社ストライク
代表取締役社長 荒井 邦彦

一橋大学卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。

ただいまご紹介いただきました、1994年卒業の荒井邦彦と申します。本日、皆様の門出を祝し、お話をさせていただく機会を頂戴できましたこと、大変光栄に存じます。

さて、皆様には1994年卒業とご紹介いただきましたが、実は私は1993年に卒業するはずでした。しかし、学生時代は怠惰な生活を送っており、卒業に必要な単位が足りず、1年遅れての卒業となりました。同級生の殆どが前年に卒業していたため、当時は卒業式にも出席せず、本日、32年遅れの卒業式を迎えたような気持ちで、この場に立っております。

昨年は、特別講義「スタートアップと資本政策」に登壇させていただき、ご参加いただいた皆様の中には、お見覚えの方もいらっしゃるかもしれません。初めてお目にかかる方もいらっしゃるかと思いますので、私が卒業してからどのような道を歩んできたのか、簡単にお話させていただきます。

学生時代に公認会計士試験に合格しておりましたので、1993年から会計士として社会に出ました。当時は、公認会計士として非常に充実した日々を送り、退職の際には惜しむ声もいただきました。

私が会計士を選んだのは、就職活動が肌に合わなかったからです。会計士であれば、試験に合格していれば採用してもらえます。また、いずれは起業したいという思いもありました。しかし、学生時代に起業する勇気はなく、まずは社会に出て経験を積もうと考えました。とはいえ、普通の企業に勤めるのは気が進まず、消去法的に会計士を選んだというのが正直なところです。

しかし、会計士の仕事は、結果として私にとって非常に有意義な経験となりました。私が配属されたチームは、大企業ではなく、これから上場を目指す野心の強い経営者の方々を支援するチームでした。実際に、担当した企業の中には、その後上場を果たした企業もありました。

仕事は多忙を極め、夜間にクライアントから呼び出されることもありました。ある時などは、夜9時頃に「先生、どうしても数字が合いません」と横浜まで呼び出され、車を走らせたこともありました。そのような生活ではありましたが、非常に楽しく仕事をしておりました。

そのような中で、毎年M&Aを繰り返しているクライアント企業と出会いました。30年前からM&Aという行為はありましたが、報酬を得て取引をあっせんするという事業も存在していましたが、毎年のようにM&Aを行う会社はまだ珍しい時代でした。

M&A では、億単位、場合によっては数百億円という大きなお金が動きます。当時、起業したいという思いはありましたが、具体的な事業のアイデアがなかった私にとって、大きなお金が動く M&A の世界は非常に魅力的に映りました。もちろん、大きなお金が動く世界に関われば、自分も豊かになれるのではないかという下心もあったことは否定しません。そのような思いから、現在の株式会社ストライクを創業しました。

創業から 28 年、本当に様々なことがありました。創業当初は、営業経験もなかったため、顧客の獲得に苦労しました。預金残高は減っていく一方で、ストレスから十二指腸潰瘍になったこともありました。やっとの思いで獲得した顧客は、M&A を初めて行うという状況で、成約までに 2 年もの歳月を要しました。ようやく報酬が振り込まれた時のことは、今でも鮮明に覚えています。三菱銀行（現三菱 UFJ 銀行）恵比寿支店の ATM で、何度も通帳を記帳し、1500 万円の報酬が振り込まれたことを確認しました。1 時間おきに通帳を記帳していたので、周りの人からは「よほどお金に困っているのだろう」と思われていたかもしれません。しかし、それほど嬉しかったのです。

約 9 年前には、証券市場に上場することもできました。しかし、上場後には、信頼していた幹部がキャピタルゲインを手にして退職するという出来事もありました。本当に様々な苦労がありましたが、生まれ変わってもまた起業するかと問われたら、迷わず「イエス」と答えるでしょう。

なぜなら、辛いこともたくさんありましたが、それ以上に得られたものが大きかったからです。最初は私一人で始めた会社も、上場のときには 30 人ほど、今では 400 人以上の仲間が共に働いてくれるようになりました。会社が成長するにつれて、社会的な責任も感じるようになりました。

ストライクを創業したのは、私が M&A の世界に魅了され、豊かになりたいと思ったからでした。しかし、仲間が増えるにつれて、それだけではいけないと思うようになりました。

現在、ストライクでは、「世界を変える仲間をつくる」というミッションを掲げています。M&A は、単なる企業の売買ではなく、新たな仲間をつくるための手段だと考えています。一人でできることには限界があります。仲間と協力することで、より大きな目標を達成できると信じています。そして、その仲間づくりの橋渡しをするのが我々の使命であると明確に理解できるようになりました。

卒業生の皆様も、社会に出れば、自分は何者なのか、社会にどのように貢献できるのかと悩むことがあるでしょう。そのような問いに対する答えを見つけることは、容易ではありません。しかし、答えを見つけた人は、きっと幸せな人生を送ることができるでしょう。

私自身、世の中から明確な役割と目標を与えてもらっていることをとても幸せだと思っていますし、ストライクを通じて社会に貢献できることがあると信じています。それが、多少の苦労があっても乗り越えられる原動力になっています。

皆様の中には、起業を考えている方もいるかもしれません。しかし、全員が起業する必要はありません。世の中には、大企業でないとできないことがあります。一方、大企業ではできないこともあります。社会には、必要とされているにもかかわらず、大企業では手がけられない仕事がたくさんあります。市場規模が小さかったり、複雑で面倒だったりする仕事は、大企業には向いていません。そのような仕事こそ、起業家が担うべき役割だと考えています。

本日、この場でお話させていただく機会を与えていただいたのも、卒業生の皆様の中に、将来起業する人が現れることを願ってのことだろうと思っています。そして、皆様の中から何人かで構いませんので起業の道を選択する人が出てきてくれたら、私が今日、ここでお話ししている意味はあったと思います。

最後に、学生時代の友人についてお話させてください。

仕事というのは、一人で行うこともできます。実際、私の前職である公認会計士は、一人で仕事をしている人も多くいます。プロフェッショナルと呼ばれる仕事は、一人でもできる場合が多いでしょう。

では、なぜ会社に就職して大きな組織で働くのか、あるいは起業してチームを作って仕事をするのかというと、一人ではできないことには限りがあるからです。一人ではできないことも、二人ならできるかもしれません。三人なら、もっと大きなことができるかもしれません。だからこそ、チームを作って仕事をするのです。一人の力よりも大きな力を発揮するために集団で仕事をする、一つの目標に向かって仕事をする、これは人類の知恵だと思います。

今、皆様の隣にいる友達、友人、このような人たちが、30年後には大きな力になってくれます。私の同級生にも、私と同じように起業して上場を果たした人がいます。昨年の春学期の授業にも、一緒に登壇してもらいました。このように、同級生の中からも、様々な分野で活躍している仲間が出ています。大手商社で部長や役員になっている人もいます。メガバンクで常務になった人もいます。

少々言葉は悪いかもしれませんが、「使い道がある」のです。何が良いかというと、学生時代の友達には、利害関係がないということです。社会人になってからも、もちろん仲間是可以します。しかし、学生時代の仲間は、そのような利害関係が全くありません。本当に友達として付き合える、それがとても大切だと思います。

皆様の時間、これは皆様のものです。皆様がこれから歩まれる人生、これも皆様のものです。ぜひ、今隣にいる友人、ここ一橋大学で得た交友関係、そして卒業すれば後輩ができます。すでに私のような（あまり先輩風を吹かせるのは好きではないのですが）先輩も

います。そういう人たちとの関係を大切にしてください。ぜひ、ここにいたこと、一橋大学にいたことが、皆様の将来の役に立つようにと願っております。

最後になりましたが、いずれどこかでまた皆様とお会いできる機会を楽しみにしております。

ご卒業、誠におめでとうございます。